

『アジア経済とは何か —躍進のダイナミズムと日本の活路—』

後藤 健太 著

国際領域 上席主任研究官 樋口 倫生

本書の目的は、21世紀に入って見られるアジア経済の新しいダイナミズムと、日本が発展するための課題と可能性を明らかにすることにあります。その際、地域を広範にまたぐ国際的な生産分業体制、つまりグローバル・バリューチェーン（GVC）の展開、そして、中所得国の台頭によるアジア経済の多極化に着目します。GVCとは、グローバル展開する、製品企画や設計、生産や販売といった一連の経済活動を指します。

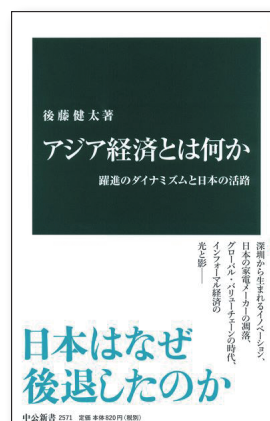
では本書の内容を見ていきましょう。まず第1章「『日本一極』の20世紀」では、21世紀のアジア経済を理解するための前提として、20世紀における戦後日本の高度成長と日本がリードしたアジアの輸出志向型経済発展を振り返ります。第2章「アジアの21世紀はいかに形成されたか」では、21世紀におけるアジア自身の市場としての発展が示され、海外直接投資（FDI）、なかんずくコスト削減を目的として生産費用の安い国に投資する垂直型FDIの重要性が強調されます。21世紀のアジアのGVCは、この垂直型のFDIが基盤となって形成されていきます。

第3章「グローバル・バリューチェーンの時代」では、21世紀アジアの経済発展の特徴が「グローバル・バリューチェーン」をキーワードとして説明されます。かつて日本が得意としていた20世紀のフルセット型生産では、生産プロセスが一企業、一国内で完結していました。一方、21世紀型のGVCにおいては、生産プロセスが複数の工程に分割されます。これを「フラグメンテーション」といい、GVCを主導する企業による統括の下で、分解された工程がそれぞれ最適な国・企業によって分担されます。GVCが形作られる過程では、垂直型のFDIを通じて設置された海外の子会社が個別の生産工程を担当することがありますが、次第に海外の独立企業への外注という形も増え、複雑なネットワークが形成されていきます。フラグメンテーションの生起は、工程間をつなぐ費用（サービス・リンク・コスト）に依存しており、これが高すぎると、フラグメンテーション、さらにはGVCが起りません。21世紀には、インターネットをベースとした情報通信技術

（ICT）の進展と普及により、工程間をつなぐ費用が劇的に低下して、GVCの形成が促進されました。

続く第4章「なぜ日本は後退し、アジア諸国は躍進したか」では、モジュラー（組み合わせ）型とインテグラル（擦り合わせ）型の区別に注目します。モジュラー型の製品は、標準化された部品間の接合部のルールに従って、「レゴブロック」のように部品を組み合わせ製造されるもので、現在のパソコンやスマホがこれに該当します。モジュラー型の生産は、国際的分業における工程間の費用を低く抑え、フラグメンテーションとGVCの形成を容易にします。一方インテグラル型は、最終製品ごとに各部品の設計を相互調整して全体最適をめざすもので、現在でも自動車などがこのタイプになります。部品の代替性は低く、フルセット型生産へ導きます。本章では、21世紀に日本の経済が後退したのは、21世紀にはパソコンや家電製品を中心としてアジア諸国間でモジュラー型によるGVCが進展し、日本が長けたインテグラル型での生産を凌駕したことにあるとしています。

終章「アジアの時代を生き抜くために」では、それまでの議論をもとに、日本の今後の進路について、いくつかの処方箋が示されています。その中で、特に印象に残ったのは、海外投資の受け入れに関連する部分です。日本は、アジア諸国に多額の対外直接投資を行ってきましたが、対内直接投資は極端に少ないのが実情です。日本企業がGVCを統括してアジア企業を組み込んでいく形の発展の途は今後も重要ですが、アジア諸国の企業が主導するGVCに日本企業が積極的に組み込まれていく形の発展の途もまた重要になってきます。対内直接投資を積極的に受け入れ、その中で日本企業がどのように強みを生かすか。ここに日本経済活性化の一つの鍵があるというのが本書の提言ですが、読者諸賢はどのように考えるでしょうか？



『アジア経済とは何か
—躍進のダイナミズムと日本の活路—』

著者／後藤 健太

出版年／2019年

発行所／中央公論新社